



# 惨苦の夏



寂れた商店街で晩飯を買い、近道をするために裏路地に入ると前方から可愛い熊の着ぐるみがよちよち歩いてきた。驚いてその場に立ち止まると、熊も短い両手を広げたまま動きを止めた。商店街の人気者の両手に握られていた大量の風船が手から離れ、空に舞い上がっていく。

しばし見つめ合う。そして熊は両手で頭を外した。俺は呆然とした。熊の中に入っていたのは坂崎琴海だった。

坂崎と最後に会ったのは高校の卒業式の時だから、五年ぶりの再会という事になる。お互い札幌に住んでいる限り偶然出会う可能性はあると思ってたけど、まさかこんな形で出会うとは思ってもいなかった。

俺は坂崎琴海に多大なるトラウマを抱いている。こいつのせいで女が怖くなったし、恋愛に消極的になった。でも決して坂崎を憎んだ事は無かった。

でも、熊の着ぐるみ姿の坂崎を見て始めて、憎しみとか恨みとかそういう負の感情が沸き上がってきた。

坂崎は頭を地面に置いて、器用に背中中のチャックを外して熊から脱出した。そして叫んだ。

「麻里奈死んじゃった！」

間髪入れずに、また叫ぶ。

「自殺しちゃったんだ。ねえ、麻里奈自殺しちゃったんだよ」

俺は疑問をぶつけた。

「麻里奈って誰？」

坂崎は大きく目を見開いた。

高校二年生の夏休み。宿題のプリントは間違っ捨ててしまったし、特にやるべき事もないので俺は優雅で気ままな日々を過ごしていた。

でも夏らしい事は何もしていなかった。それはまずいと思った。だから俺は近所の駄菓子屋に行って、「おばちゃんアイスちょーだい！」と叫び、一本五十円のアイスを買う事にした。

という事で俺は自転車に乗って駄菓子屋を目指した。琴似本通りを突っ走り、忌々しい香連高校の前を通り過ぎる。校舎と道を挟んだ向かいにあるグラウンドでは、ラグビー部が尋常ではない大声で叫びながら走り回っていた。きっと彼らは帰宅部の生徒には知る由もない楽しげな夏を感じているのだろう。

香連高校を通りすぎてまっすぐ走り、三角山の手前で角を曲がった所に駄菓子屋がある。すぐそこに古臭いオモチャ屋があるので、子どもたちがウロウロしている。

俺は駄菓子屋の前に自転車を駐めて、思わずその場に立ち止まってしまった。店の前に年代物のゲーム筐体が置いてあるのだが、そのゲーム筐体の前に隣のクラスの女子が座り込んでいたのだ。

口には棒付きのキャンディー(ロリポップというやつか?)を咥えていて、左手でスティックを掴み、右手で素早くボタンを弾いている。その動作には無駄が無く、彼女の後ろに群がっている子どもたちは尊敬と畏怖の念で彼女の事を見ていた。

彼女の名前は坂崎琴海。……だったと思う。数学の合同授業で斜め前に座っている子だ。何度か話した記憶がある。坂崎は愛嬌があつてなかなか可愛らしい子で、いつも色んな人達に囲まれて楽しそうにしている明るい女の子、という印象があつた。

坂崎は真っ白のワンピースを着ていて、見ているだけで涼しげだった。でもその表情は暑苦しく、なぜこんな真昼間からレトロなゲームにそこまでの情熱を捧げているのか分からなかった。他にやる事はないのか。

やがて坂崎は最終ステージのラスボスを華麗なる動きで撃破した。子どもたちは歓声をあげた。

「すげー！ メタルスラッグ名人だー！」

坂崎は立ち上がってガッツポーズをした。

「見たかクソガキ共ー！ これが大人のテクニクだー！」

「やべー！ お姉ちゃんやべー！」

坂崎は「イエーイ！」とか言いながらくるっと一回転した。回転中にバッチリ目が合う。坂崎は回転を終えると、くるりとこちらを振り返った。

「……あれ？」

坂崎はこちらに一步近づいてきた。

「えっと……。H組の赤沢くんだよ。私の事分かる？ G組の坂崎琴海だよ」

「あ、うん。分かるよ。話した事あるよね」

「ちょっとだけね。こんな所で何してんの？」

「えー……。いや」

坂崎は右手で長いもみあげをいじりながら微笑んでいる。俺はつい口ごもりそうになる。

「アイス買いに来て……。なんか知ってる人いるなーと思ってさ」

「ふーん」

「いつもここでゲームしてるの？」

「今年はね。暇だから」

沈黙。坂崎は小さく笑った。

「アイス買いに来たんじゃないの？」

「ああ」

俺は駄菓子屋の中に入った。坂崎も後からついてきた。店番をしていたおばちゃんは、ぼんやりカウンターの上に置いてあるテレビを眺めていた。おばちゃんがボソリと呟いた。

「残念だったね」

「え？」

「地方大会さ。香連高校、一回戦で負けただろう」

「あー。そうなんですか」

「アンタ香連の生徒じゃないのかい」

どうして俺が香連高校だと分かったのだろうか？ という疑問は、笑顔で「おばちゃんやっほー」とか言ってる坂崎を見て解消された。彼女はここの常連なのだろう。

「一回戦で琴別高校にコールド負けさ。アンタ、どう思う？」

「まあ……。残念ですね」

「それだけかい。もし優勝してたら、今年は甲子園に……」

「はいおばちゃん五十円」

いつのまにかアイスを手にとっていた坂崎が、五十円玉をカウンターの上に置いた。俺も慌てて冷蔵庫からアイスを取り出して、五十円玉をカウンターに置いて店を出た。

坂崎は店の前に置いてあるベンチに座った。俺がぼんやりと突っ立っていると、鼻で笑い挑発するような声で言った。

「座りなよ」

「ああ」

俺は坂崎の横に座った。

「孫がうちの生徒で、野球部のレギュラーなんだってさ」

「へえ」

「試合に負けて、泣いて帰ってきたらしいよ。甲子園に出るところか、スポーツなんてロクにやってない公立の進学校にコールド負けなんて、いい笑いもんだ。俺はなんのためにスポーツ推薦で香連に来たんだ。うえーん」

「熱いな」

「ね。のんきにアイス食べてる方が人生は楽しいよ」

坂崎はアイスをさっさと食べ終わると、棒を思い切り放り投げた。向かいの家の塀に当たる。そしてふうっと大きなため息をついた。

両手をベンチに置いて足をぶらぶらさせて、退屈そうに地面を眺めている。近くでセミが必死こいて鳴いていて、子どもたちは筐体の前で騒いでいる。心がざわざわして、頭は混乱していた。

「赤沢くんってさ、夏休み毎日何してるの？ 私は退屈してるけど」

「面白い事はしてないね」

「彼女とかいないの？」

「彼女がいたらこんな所でアイス食ってないよ。坂崎は？」

「えー？」

坂崎は意味ありげな笑みを浮かべたが、すぐに真顔に戻ってボソリと呟いた。

「夏休み中は無理かなあ。今は彼氏いないよ」

その言い返しには少し引っかかったけど、俺は話題を考える事に精一杯になっていた。

さっきからこんな当たり障りの無い会話をジメジメ続けていてもダメだ。これはチャンスなのだ。夏。可愛い女の子。出会い。少なくとも、このままアイス食って喋って家に帰る訳にはいかない。

「坂崎はこの後用事あるの？」

「んー……。無い！」

「じゃあ……」

俺は舌で唇を舐めた。

「飯食いに行こう」

坂崎は思い切り俺の背中を叩き、飛び跳ねるように立ち上がった。

「琴海って呼んでね」

うまい飯でも食いたい所だったが、お互い貧乏人だという事が分かったので、俺達は地下鉄琴似駅の目の前にあるダイエーに行き、そのダイエーの中にあるドムドムバーガーで晩飯を食べる事にした。本当はオシャレな店にでも行きたい所だが、金が無いのではしょうがない。

坂崎はエビカツバーガーだけ注文した。俺はてりやきバーガーを注文したかった所だが、口元が汚くなる恐れがあるので、無難にチーズバーガーを注文した。

坂崎は両手でエビカツバーガーを持ち、小鳥のように少しづつ食べている。俺は五口くらいで食べきってしまったので手持ち無沙汰になった。

坂崎は半分ほどまで食べ終わると、突然身を乗り出して聞いてきた。

「ねえ、部活とかやってないの？」

「いや、帰宅部。坂崎は？」

「琴海」

「あー……。うん」

俺は一度咳き込んでしまった。恥ずかしい。

「えっと。琴海は？」

「私は演劇部」

「へえ。演劇好きなの？」

「大好き！」

そう言った時の坂崎の顔は輝いていた。その表情と言葉の響きには、演劇に対する絶対的な真心が込められている気がした。

坂崎がどういう子なのか、俺は知らない。善人なのか悪人なのかも分からない。でも、もしも坂崎が悪人だったとしても、演劇に対してだけは純粹で真面目なのだろう。そう思った。

「九月の学祭で舞台やるんだよ。観に来てね」

「ああ、絶対行く。どんな舞台なの？」

「主演、私。脚本、私。内容は秘密」

「すげえじゃん」

「でしょ。私マジで今回の舞台は気合入ってるんだ。だって始めて自分で脚本書いた舞台なんだよ。これ重要。ていうかね、どの高校もシェイクスピアだとか、なんかそういう……。何万回も演じられてきたような舞台ばかりやってるの。なんかそういうのってつまらないと思わない？ やっぱりやるからにはさ、自分たちのオリジナルで舞台やりたいじゃん。ね？」

「本当に舞台好きなんだ」

「うん。あ、ねえ。明日学校で稽古やるんだけどさ、暇なら観に来ない？」

「いま内容秘密って言ってなかったっけ？」

坂崎はエビカツバーガーを手にしたまま固まった。そして爆笑し始めた。それにつられて俺も笑ってしまう。

「私痴呆かもしんない。ヤバいやババ」

「いいよ、観に行くよ。内容は誰にも言わないから」

「うん。ありがと。稽古は十二時頃から始めるから。場所は第二体育館ね」

「分かった。絶対行くよ」

その後、俺達は他愛のない会話をして別れた。俺は家に帰っても高まる気持ちを抑えられなかった。ある日突然、隣のクラスの可愛い女の子と仲良くなって、一緒にご飯を食べに行った。友達に片っ端から電話して自慢したいくらいだ。

窓を開け放して、ベッドに寝転がる。涼しい風が部屋に入り込んでくる。風鈴がりんりんと音を立てて鳴る。ラジカセからDJの透き通るような声が響いてくる。近所で子どもたちが花火をやっているらしく、楽しそうに騒ぐ声が聞こえてくる。

夏だ。今は夏なんだ。そして本物の夏が始まったんだ。

最高の気持ちだった。心が寛容になっているような気がした。今なら突然誰かに顔面を殴られても笑って許せるような気がする。世界は素晴らしい。この世界は輝いている。人生最高！

翌日。俺は午前十一時半に香連高校に到着した。考えてみれば、休みの日に学校に来るなんて生まれて始めての経験かもしれない。

南玄関のドアは開いていたのでそのまま中に入ったが、それだけで新鮮な気持ちがあった。いつもは飽きるほど校舎の中で過ごしてるっていうのに。変な感じだ。

自分のロッカーの扉を開ける。ロッカーの中には教科書とノートが詰め込んであるが、上靴が入っていない。そうだ。上靴は家に持ち帰っているんだ。

俺は痛恨のミスに苦笑いしつつ、表玄関でスリッパを履いて階段を上がって行った。

新校舎の三階に第二体育館はある。まあ第二体育館とは名ばかりで、視聴覚室よりも狭い部屋なのだが。

第二体育館の扉を開けると、部屋の中央に坂崎が一人で座っていた。

「おっ。早いね。まだ稽古始まってないよ」

制服姿の坂崎はかなりリラックスしているようだった。水色のワイシャツは第二ボタンまで開けていて、赤色のリボンは付けていない。

「あれ。他の人達は……？」

「んー。お昼ごはんの買い出し。今から買い出し行ってるようじゃ、稽古始まるの遅くなるかもねー」

坂崎はそう言いながら餡パンを頬張っている。床には購買の自販機で売っている紙パックのイチゴオレが置いてある。

ちょっとだけ羨ましいと思った。そして、俺がどんなに退屈な日々を送っているのか良く分かった。

坂崎の正面にあぐらをかいて座ると、坂崎は大きく首を横にかしげた。ちょっと演技っぽい。

「赤色くんはお昼ご飯食べたの？」

「いや、食べてない」

坂崎は食べかけの餡パンを俺の顔の前に突き出した。

「半分食べる？」

俺は咳き込みそうになるのを堪えて、冷静に答えた。

「お腹空いてないし、大丈夫だよ」

「そう？」

坂崎は無言で餡パンを食べ終わると、唐突に低い声で言った。

「エグいよ」

「あん？」

「舞台の内容」

「ああ。どういう風にエグいの？ グロテスクなシーンでもあるのか？」

「人間の本性を突き刺すような脚本なんだ」

なんだか面倒くさそうな話が始まりそうだ。

「ねえ。ちょっとだけ話聞いてくれる？」

坂崎はイチゴオレを喉を鳴らしてごくごく飲みながら、リスマたいな目でじっと俺を見つめてくる。目線が全く動かない。見つめられるのには弱い。

「いくらでも」

坂崎はイチゴオレを床に置くと、ふうと小さなため息をついた。

「この前さ、数学の佐藤が死んだでしょ」

「ああ……。そんな事もあったね」

佐藤というのは、六十歳くらいの数学教師である。五月頃に脳卒中かなんかで突然死んだ。

まあ影の薄い教師だったし、なんだか嫌味っらしい爺さんだったので、誰かが代表して佐藤の葬式に行くなんて話はなかったし、全校集会も開かれなかった。ただ朝のホームルームで担任からちょっとお話しがあっただけだ。

「佐藤が死んでどう思った？」

「どうって……。別に。何も思わない」

坂崎はニヤリと笑った。

「そう。その反応」

「え？」

坂崎はゆっくりと立ち上がると、両手を大きく広げた。

「ここは札幌私立香連高校であります。偏差値は四十以下。Kランクのゴミクズでも入学できる札幌を代表する底辺高校。集団万引きで停学。同級生をいじめて退学。タバコがバレて停学。一年生をボコボコにした二年生が停学。バスで無賃乗車して停学。バスの中でカップ麺食べて残り汁を床にぶちまけて嚴重注意。赤沢くんのクラスの科学の時間は授業崩壊してて、科学の先生ちょっと鬱状態。体育教師はバスケット部の女子生徒のアイコン画像作ってたのがバレて大騒ぎ」

「ああ、色々あったよな」

「去年の停学、退学者は三学年合計で八十九人。驚きの数字だよな。全校生徒が千人居るって事を考えても、この数字は異常だよ」

そこまで言い切ると、坂崎はニヤリと笑った。

「……で、赤沢くん。佐藤が死んだと分かった時、クラスはどんな感じだった？」

「そりやお祭り騒ぎさ。皆してよっしゃー佐藤が死んだイエーイ！ おい佐藤どうせ死ぬなら俺のノート返してから死ぬよー！ 佐藤そろそろ死ぬと思ってたけど本当に死んでくれた イエーイ！」

坂崎は小さく頷いた。

「つまり、本題に入る前にこれだけは言っておきたいんだけど……」

あ、まだ本題じゃなかったんだ。

「私は狂った香連高校での生活しか知らない。他の、普通の高校がどんな感じなのか分からない。だから私の知ってる世界は狭いし、偏ってる。だから世間から離れた感覚になってるかもしれない。でも……」

坂崎はひときわ声を低くして、呟いた。

「結局、人間ってのは大切な人が死んだ時だけびいびい泣いて、どうしても良い奴が死んだらゲラゲラ笑って死んだ人を罵るような生き物なんだよ」

俺はどんな事を言っているのか分からず、「まあ」とか「そうかもな」とかそんなような事をもごもご口に出していた。

「一応言っておくけど、私だって佐藤が死んだ事はどうでもいいと思ってるよ。ていうか香連高校の先生なら、誰が死んでも嬉しい」

俺が黙っていると、坂崎は皮肉めいた笑みを浮かべた。

「先生が死んで、泣けるような学校に行きたかったけどね」

坂崎は「よいしょ」と声を出しながらその場に座り込んだ。

「まあなんか長くなったけど……。他人が死んでも笑って、騒いで、そして死者に対してボロクソ罵詈雑言を浴びせる。人間はそういう事を簡単に出来る存在なの。それが人間の本当の姿なんだ」

「うん」

「だからね、本当に舞台を観た人の人生が救われるような物語を書くんなら、綺麗事満載だったりお涙頂戴だったりするような嘘のお話を書くんじゃないで、人間の本性を徹底的にさらけ出したお話を書いた方が絶対に響くし、人の人生を良い方向に持っていけるんだよ。嘘ばかりの綺麗な脚本の舞台なんてね、舞台を観てる時だ

けしか救われないんだよ。私はそれじゃ嫌だな。舞台を観終わった後も、ずっと人の心に残るような舞台をやりたい。だから私は舞台の上でだけは嘘つかないし、人間の本性からも目をそむけない」

俺は呆然としていた。ていうか、もう何に対して呆然としているのか自分でも分からなかった。

色々な思いが頭の中を駆け巡った。坂崎という人間はとても魅力的で、演劇に対する気持ちは俺が到底理解できない程に奥深い。そして確固たる信念を持って舞台上に上がっているというなかなか熱い奴なのだ。

頭の中を駆け巡っている感動をどう言葉にすれば良いのだろうか悩んでいると、部屋の扉が勢い良く開かれた。そこには見知らぬ女が立っていた。

「おー麻里奈。やっと帰ってきた。あ、この人は赤沢怜二くん。稽古の見学に来たの」

俺はぺこりと頭を下げた。

「あ、えっとね。この子は笹岡麻里奈。同じ二年生だよ。クラスはB組」

笹岡麻里奈は、かなり強気というか高圧的な雰囲気を持っている女だった。髪の毛は長く、目は少しつり上がっている。右手には封筒を持っていた。

「ふーん。稽古って事は……。入部希望者？」

坂崎がぐりんと首を曲げて俺を見てきた。

……え？

俺、演劇部に入部すんの？

「いや。そういう訳じゃなくて。なんとなく、観に来て……」

「は？ 入る気も無いのになんとなく舞台の稽古観に来たの？」

「え？ えっと……。まあ、面白そうだからって」

「何こいつ」

麻里奈が眉間に皺を寄せながら坂崎を見た。

「私が誘ったんだよ。ていうか麻里奈、攻撃的」

「へえー」

笹岡は鼻で笑い、坂崎に不敵な笑みを浮かべた。坂崎はとぼけたように小首を傾げていた。

何こいつ。それは俺のセリフだ。

笹岡は坂崎の前に歩み寄ると、封筒の中から数枚の大きな紙を取り出した。紙には風景画やオリジナルと思われるキャラクターの絵が描いてあり、どれも上手かった。

「あ、ありがとう麻里奈。やっぱ上手いねー」

そのポスターは何？ って聞いたかったけど、笹岡に何か言われそうだったからやめた。どうせ演劇部で使う小道具だろう。

……ていうか、こいつも演劇部？ 一気に気持ちが落ちていく。今日中に辞めてくれないかな。

笹岡は絵を渡すと、一通り坂崎と雑談を交わしただけで部屋から出て行った。

「……あの子は演劇部じゃないの？」

「えっ。違うよ。帰宅部だよ帰宅部。あの子絵うまいから、いつも舞台で使うイラストとか宣伝ポスター描いてもらってるの」

「なるほどね」

そんな話をしているうちに、他の部員達が戻ってきた。演劇部の面々の中に俺が一人ぼつんと紛れているのは気まずいし、他の部員達も「誰だこいつは」的な目で俺を見て戸惑っていたので、そそくさと第二体育館から立ち去った。なんだか惨めというか情けないというか、なんともいえない気持ちだった。

三十分後に第二体育館へ行くと、やっと稽古が始まっていた。部屋の中央に坂崎が立っていて、上手側に男子生徒が二人、下手側に女子生徒が三人立っていた。六人とも台本を持ちながらセリフを叫んでいる。他の部員たちは六人を取り囲むようにして座り込み、じっと演技を見守っている。



正直言うと、高校演劇なんて大したことないと思っていた。みんな同じような低レベルの集まりなんだろうと思っていた。でも実際は違った。レベルの差はハッキリとしていた。

坂崎の演技力とその気迫は圧倒的だったが、他の五人の演技はひどかった。その五人はそれなりに真剣な表情をしてはいるんだけど、どこかぼかんとしているというか、間抜けに見える。セリフもやっぱり棒読みで、元気に声を出し出さないとと言われて頑張っって大声を出している小学生みたい。

そして坂崎を除いた五人に強い違和感を覚えて、その違和感にすぐ気がついた。まあ要するに下手くそなんだけど、明らかに「僕達いま演技してます！」という感がありありとしているのだ。

でも坂崎だけは違った。表情を見ただけで気が狂うほどに本気になっている事が分かる。声にも気持ちが乗っていて、観たものを引き寄せるほどの迫力があつた。吐き出される言葉も凄く自然だった。

坂崎以外の奴らは間違いなく演技をしていた。でも坂崎だけは演技をしていなかった。演技が自然で感情的だから、良い意味で坂崎の演技は演技にすら見えないのだ。

坂崎は台本を投げ捨てて、大声で叫んだ。

「私はクズだ！ クズの中のクズだ！ それの何が悪い！ クズ上等！ クズさいっこー！」

隣にいた男子生徒も負けじと叫んだ。

「クズを悪いとー。言ってるわけじゃない！ ただ僕はあ！ ク、ク……。あ、ごめん。もう一回いい？」

皆げらげらと笑った。でも坂崎だけは違った。凄まじい目つきで男子生徒を睨みつける。

「そこさ、いつも囁んだり止まったりするよね。意識しすぎなんじゃない？ そんなんで本番どうするの？ あとその掠れ声どうにかなんないの？ てかなんで掠れてんの？ もっとこう……。分厚い声でさ、自然に叫んでよ。そんな掠れた気の抜けた棒読みでセリフ叫ばれてもさ、観てる方からしたらどっちらけなんだよね。いい？ アンタがクソみたいなセリフ喋ったら私の演技まで間抜けに見えるの。分かる？ いや何睨んでんの。私なにか間違った事言っただけ？ 自分の演技に自信持ってんの？ 私になにか落ち度があるとでも？」

男子生徒は舌打ちした。

「坂崎の演技、オーバーすぎるんだよ」

坂崎は口笛を吹いた。

「ごっめんなさーい！ じゃあ私もアンタみたいな演技するわ。それでおーけー？ 素晴らしい舞台になる？ なるわけねーだろ！」

はて。俺は舞台稽古を観に来たはずなのだが。

坂崎は台本を拾い上げると、一度咳き込んだ。

「もう一回やってみて」

男子生徒は不貞腐れたような顔で坂崎を睨んでいる。ウニのように逆立てている髪型が間抜けに見えてくる。

「私部長だよ。部長の言う事は聞けよ。聞かないと殺すぞ」

なんと坂崎は部長だったらしい。

ここで俺はようやくその場に座り込んだのだが、坂崎の勢いに押されてなぜか正座してしまった。それを見た男子生徒は何か諦めたような、どうでもよさそうな顔になって、同じセリフを叫んだ。

「ク、クズを悪いと！ 言ってる訳じゃなあーい！ ただ僕はっ。クズである事に誇りを持つてるお前が気に喰わないんだあ」

坂崎は大きく息を吸い込むと、同じセリフを男子生徒よりもかなり早口で叫び始めた。

「クズを悪いと言ってる訳じゃないただ僕はクズである事に誇りを持つてるお前が気に喰わないんだよ！」

おみごとだった。囁まずに、気迫を込めてセリフを言い切った。低い声で放たれたそのセリフには力があり、ゾクゾクするような魅力があつた。このイマイチでダサイセリフも、役者の演技一つで素晴らしいセリフに変える事ができるのだ。

男子生徒は黙って坂崎を見ていた。もう彼に反論する気配はなかつた。これだけの實力差を見せつけられたら

、もう何も言えないだろう。

カッコイイなと思った。坂崎はただ叫び散らしてヒステリックになるだけじゃなく、ちゃんと実力を示す事で相手を黙らせる事が出来る。

俺にはそんな事できない。坂崎は凄い奴だ。

稽古は夕方前に終わった。舞台稽古なんて見ても大して面白くないだろうと思ってたけど、なかなか面白かった。それはもちろん坂崎のおかげだ。彼女の演技はいつまで見ても面白かったし、飽きなかった。力強く、訴えかけるような演技。俺は坂崎の演技に完全に惹かれていた。これでもしも坂崎がこの場にいなかったら、俺は開始五分で第二体育館から去っていただろう。

稽古が終わって皆が帰り、俺と坂崎だけがその場に残された。

「どうだった？」

涼しい顔して去っていった皆とは違い、汗だくになっている坂崎が感想を求めてきた。俺はこういう場合、無難に「みんな上手くて良かったと思うよ」みたいな返答をする性格だ。でも今は自分の本心に嘘ついて無難な返答なんてしたくなかった。本当の事を伝えたいと思った。

「坂崎の演技はすげえと思った。見てて夢中になった。でも他の部員の演技はひどかった」

坂崎はニコリと笑った。

「ありがとう」

「いや、でもさ、マジで坂崎凄いよ。なんかこう……。格が違うっていうか。なんとなく趣味で演技やってる奴らとは世界が違うっていうか……。プロと素人くらいの差があるっていうか……。俺演技の事とか全然分かんないけど、多分坂崎の演技に対する気持ちっていうのがさ、圧倒的なんだと思った。坂崎って劇団とかに入っていないの？」

「褒めすぎ。劇団には入ってないよ」

「なんでだよ！ 入ればいいじゃん。坂崎はあんな奴らと一緒に高校演劇なんてやってる場合じゃないよ」

坂崎は照れたように、人差し指で頬をぽりぽり搔いた。

「んー……。そりゃ興味はあるけどね。ほら、会費とか結構高いし。劇団に入るのは高校卒業してからでいいかなーって」

「そっか……」

稽古してる時は荒れ狂う鬼と化していた坂崎も、今は落ち着いて優しげな雰囲気に戻っている。そのギャップの違いを目の当たりにして、さっきの坂崎はどこか遠い星からやってきた別人のように思ってしまう。

坂崎は台本をカバンにしまいながら、よく通る声で言った。

「赤沢くん。この後ひまー？」

「え？ ああ。暇だけど」

「じゃあさー。どっか遊びに行こう」

心臓がドクンと跳ねる気がした。唾を飲み込み、さっきの男子生徒みたいに嘸まないように心がけながら、声を絞り出す。

「いいよ」

「やった。じゃあさ、一回私ん家くる？」

「え？ 別にいいけど……。なんで？」

「シャワー浴びたい」

めまいがした。坂崎の家に行く？ ていうか、シャワー？

俺の脳みそは、もはやこれ以上何かを考えられるような余裕を持っていなかった。

俺は坂崎の部屋の中央で正座していた。さすがに女の子の部屋に来ただけで緊張する事はしないが、それでもやはり落ち着かない。

坂崎の部屋は普通だった。薄型のテレビ。カラーボックスが二つ。大きな本棚が一つ。勉強机の上にはノートパソコンが置いてある。洋服ダンスの上にはアンプとプレイヤーと古いスピーカー。ぬいぐるみはそこら辺に何

個か転がっていて、ベッドの上には大きなカビパラ。カーペットは水色。カーテンはオレンジ色。特別なコメントは何も思いつかなかったし、興味が惹かれる物も特に無い。強いて言えば、本棚とカラーボックスに並べてある小説とDVDの量がとてつもなく多い事くらいか。

俺がぼんやりとカラーボックスを眺めていると、私服姿の坂崎が現れた。風呂上がりの坂崎琴海の登場に俺の心拍数は最高潮を迎えていたが、坂崎の髪は乾いていたし、いつもと変わらない姿だった。髪の毛はもうドライヤーで乾かしていたらしい。

学校祭で作ったらしい黒色のクラスTシャツに水色のスカートというラフな格好の坂崎は、俺の横にちょこんと座って扇風機の電源を付けた。そして扇風機の前に顔をおもむろに近づけて「あ〜」と宇宙人のような声を出した。

俺がげらげら笑っていると、坂崎は笑顔で質問してきた。

「ねえ、何見てたの」

「え？」

「なんかカラーボックスじーっと見てたけど」

「ああ……。本とかDVD、沢山あるなーって思って」

坂崎はふふんっ。と鼻を鳴らした。

「勉強してますから」

「やっぱ凄いなあ」

坂崎は這うようにしてカラーボックスまで近づくと、DVDを一つ取り出した。

「雨に唄えば。これマジで最高。ミュージカル映画なんだけどさ、良いんだよこれ。凄く良いの」

「観てみたいな」

俺がそう言うと、あっさりとDVDを差し出してきた。

「貸してあげる」

「いいの？」

「名作はね、色んな人に触れて欲しいから」

俺はありがたく受け取った。坂崎は他にも色々な本や映画を教えてくれた。でも俺はあまり本や映画に触れた事が無いから、坂崎の教えてくれた作品で知っているものはほとんど無かったし、もちろん作者の名前も全然分からなかった。せいぜいシェイクスピアを知っているとか、その程度である。

俺も坂崎も、普通の高校生として日々を送っている。でも坂崎と触れ合って、普通だけど味のある生活と、普通で味のない生活がある事を知った。俺は毎日ゲームをしたりぼんやりパソコンの前に座って無駄に時間を過ごしているだけだが、坂崎は色々な作品から価値観、言葉、外国の風景、情報、色々な物事を吸収しているのだ。

坂崎は一通り作品について語ると、唐突にこう言った。

「ねえ。今年はもう花火した？」

「ん……。まだしてない」

「じゃあさ、花火やらない？」

俺はその言葉に喜ぶと共に、さすがにこの辺で俺の脳みそが危険を感じ取り始めた。

偶然駄菓子屋で出会って意気投合して、舞台稽古の見学に誘われるくらいなら、まあそんなにおかしな事ではない。でも家に呼ばれた時からちょっとこれはおかしいぞと思い始めた。そして次は花火。

積極的すぎる。俺と坂崎は最近まで、ロクに会話なんてした事なかったのに。

もしかして坂崎はずっと俺の事を好きだったのかも。さすがにそんなポジティブな事を考えるほど俺もバカじゃない。

でも俺は断る気なんて無かった。昨日までは家で何をしてもなくぐうたらしている事が当たり前の夏休みだと思っていた俺は、もう坂崎琴海と一緒に居る事でしか生きられない思考回路になっていたのだ。坂崎琴海と築

かれるであろうこの先の輝かしい日々を放棄できる訳ない。もうあの退屈な日々を享受する事は不可能だ。

「いいね。花火やろうぜ」

「やった！　じゃあ花火買いに行こう」

そう言って、坂崎はテーブルに置いてあった白色のポーチを肩に掲げた。ポーチを片手で軽く叩く。

「花火やりたかったんだ」

その子どもっぽい笑顔を見ていると、さっきまで感じていた危険なんてどこかに消えてしまった。

俺たちは近くのコンビニで花火を買った。もちろん貧乏人なので、大量の花火を買い漁るなんて事は出来なかったが。

場所は発寒川の河川敷だ。小さなクソ汚い川を横目に、俺達は河原に花火を広げた。

そして坂崎が、おもむろにポーチからキャビンを取り出した。

「吸う？」

「他人の事悪く言えねえな」

俺は頷いてタバコを一本受け取って、口に咥えた。坂崎はすかさずポーチから取り出したライターで火をつけてくれた。だから俺も坂崎が咥えたタバコに火を付けてあげた。

坂崎はその場にしゃがみ込んで、ゆっくりと煙を吐き出した。俺がタバコを咥えながら突っ立ってぼんやり坂崎の頭頂部を見ていると、坂崎は左手の指でタバコを挟みながら、俺を見上げて作ったような可愛らしい声で「なあに？」と言ってきた。俺は顔をそむけた。

坂崎は吸い終えたタバコを地面に捨てて足で踏みつけると、次は手持ち花火に火をつけた。白色の火花が散る。

藍色の空の下で、坂崎は黙って豪快に散る火の花を見つめていた。俺も黙って自分の手持ち花火に火を付ける。

「赤沢くん」

「うん？」

「卒業したらどうするの？」

「んー……。まだ決めてない。坂崎は？」

「さあ。分かんない。でも進学はしない」

「意外だね。専門学校とかで演技やるのかと思ってた」

「それは無い」

「なんで？」

「演技に限った話じゃないけどね、なんていうか……。夢を持って、その夢を叶えようって思うまでは良いのよ。でも夢を叶えるために専門学校に行くのはあまり正しくないの。少なくとも、専門学校に行けばなんとかなると思ってる奴は、そういう事考えてる時点でもう全てが終わってる」

坂崎はロケット花火を手にとると、火を付けておもむろに夜空に掲げた。

「ドーン！」

ロケット花火は高々と夜空に舞い上がった。良い子は真似しちゃいけない。

坂崎は小さく微笑んだ。夏の風に前髪がサラサラ揺れている。

「舞台役者ってさ、誰でもなれるんだよ。そこら辺の劇団に所属するだけでいいんだもん。劇団に入らなくても客演として舞台上がる事もできる。そうでしょ？　それに専門学校に入って何するの？　演技のスキル磨いて、それから何があるの？　劇団四季に入れるコネでも作れるの？　ありえないよね」

「でも……。勉強出来るんなら良い事じゃないのか？　自分一人で出来る事は限られてる。それにほら、演技磨けば劇団四季に入れるような役者になれるかもしれないじゃん」

「もし家がお金持ちだったら、そういう専門学校に入っても良かったかもしれない。でもね、全くお金稼げない

将来性皆無の役者になるために演技の専門学校に入って、親にバカ高い授業料払わせるってどう思う？」

俺は何も答えられなかった。黙々と花火に火を付けていく。

坂崎はその場に座り込んで、まだタバコに火を付けた。ぷは一つと大げさに煙を吐き出す。

「さっきもちょっと話したけどさ、高校卒業したらどっかの劇団に入るつもり。コロポックル・コタンっていう劇団があつてね。そこが気になってるの。で、もしも劇団に入ったら死に物狂いで稽古するんだ。ていうかさ、専門学校なんか行かなくても劇団に入って稽古とかしてた方がスキル磨けるよ。きっと」

俺の思考回路は坂崎の考え方について行けなかった。俺は専門学校とか大学とかに、何かを求めたり深く考える事は一度もしていなかった。でも坂崎は色々と考えて、その結果進学しない事を決めている。

他の生徒たちは専門学校とか大学とかに希望を抱いているのだろうが、坂崎はもっともっと先を見ている。進学して「こんなもんか」という感想を抱き、挫折し絶望してしまうような凡人達と違って、坂崎は進学しても挫折する可能性が高いという未来を予想する事が出来るのだ。

河川敷の向こうから、がやがやと人の声が聞こえてきた。目を凝らしてよーく見てみると、その人の群れは俺のクラスの男連中だった。

「あれー？ 赤沢じゃん」

むさ苦しい男連中は全部で五人居た。そのうち二人は仲が良い友人。一人は学校では良く話す奴。もう二人はほとんど話した事のない奴らだった。

「……それ、誰？」

野郎五人はねっとりとした目で坂崎を見ていた。女と一緒に花火かよという嫉妬。突然舞い降りたチャンスに浮つく感情。

坂崎はニッコリと野郎共に笑いかけた。

「坂崎琴海です。G組の」

野郎共は「あー」とか「そういえば見た事あるー」とか「数学の授業で同じだっけ？」みたいな事をもごもご呟いていた。

坂崎はちらりと俺に視線を送ってから、手持ち花火を野郎共に差し出した。

「一緒にやる？」

なんと。俺はつい面食らってしまった。坂崎はいたずらっ子のような笑みを俺に向けてきた。

こいつは……。

俺は強引に笑顔を作った。

「まだ花火、沢山残ってるよ」

線香花火は野郎五人に全部使われた。坂崎と一緒に居た三十分くらいの時間は、ただちょっと将来の話をして、ボソボソと花火をやっただけで終わった。

このクソつたれな野郎共たちはさぞ満足だっただろう。男五人で過ごすむさ苦しい夏の夜に、とつぜん可愛い女の子が舞い込んできて、しかもちゃっかり携帯のメルアドと電話番号まで交換していた。

嫉妬心が腹の底でぐつぐつ煮えたぎっていた。この時生まれて始めて、恋愛は楽しいだけじゃないという事を痛感した。何より俺と二人でいる時よりも楽しそうにしている坂崎を見ているのが心底辛かった。

花火をしてから三日後。俺は勇気を振り絞って文章の内容を四十分考え、更に二十分の推敲を経て坂崎にメールを送った。内容はもちろん遊びの誘いである。

雨に唄えばのDVD観たから返したい。その” ついでに” ご飯でも食べに行こう。そんな感じの内容だ。

俺は携帯電話を握りしめながら、ベッドの中に潜り込んでいた。その日は風が無く特に暑かったので俺は汗だくだった。そして一人で勝手に緊張していた。俺の夏は終わるのか。それとも進むのか。

二時間後に返信が来た。着メロの夢風車が鳴った瞬間に心臓が停止して危うくあの世に逝きそうになったが、俺はなんとか死ぬことなく携帯電話を開いた。

『いいよ』

俺は一瞬停止した。オーケーなのだから嬉しい事だし心の中でガッツポーズしても良いくらいなのだが、この素っ気ないメールに拍子抜けした。

こんなものなのか。俺が一人で興奮しすぎなのか。なんだか坂崎との間に温度差を感じて俺だけ先走っているように思ったが、恋愛の初期段階においてその温度差がとてつもなく重要である事に俺はまだ気づいていなかった。一人でしゃいでハイテンションな文章を書いて返信してしまった。

そして俺は坂崎と Pasta を食べに行った。そして経済状況は芳しくない状態になった。坂崎と出会う前、退屈な夏休みを埋めるべくゲームと漫画を大量に買っていたので、坂崎と遊びに行くための資金はもう底をついていた。夏休みはまだ二週間ほど残っている訳だから、この先の戦いは厳しくなるだろう。

という事で、俺はクリアしたゲームやいらぬ漫画を売って軍資金を稼ぐ事にした。物を捨てたり売ったりしない主義の俺がゲームと漫画を売るといのは、かなり珍しい行動であった。

その結果、軍資金を約七千円稼ぐ事に成功した。七千円あればなんとかこの夏は越せるだろう。そして夏が終わった後の事も考えて、アルバイト情報誌を立ち読みするようにもなった。

坂崎と Pasta を食べに行ってから四日後には、また坂崎の舞台稽古を観に行った。この頃にはかなり打ち解けてきて、坂崎にならどんな話でも出来るようになっていたし、坂崎も自分の事を奥深くまで語ってくれるようになった。時にはかなりぶっちゃけた事を語り合う事もあった。

そろそろ決めたいなと思った。早いとは思ったが、早くしないと坂崎がどこかに行ってしまうような気がしたのだ。

坂崎は別に超絶美人ではなかったが、クラスで五本の指に入るくらいには可愛かった。女なんてそれなりに可愛ければ勝手に男が群がってくる。もちろんその逆もあり。しかも坂崎のように明るくてあっけらかんとして、男子とも積極的にコミュニケーションを取るような女は絶大な人気を誇るのだ。

ちょっとでもルックスと性格の良い男が坂崎に近づき始めたら、もう俺に勝ち目はない。坂崎がフリーである今の内に勝負を決めないと俺の夏は淡い思い出で終わってしまう。それは嫌だった。俺はずっと楽しい日々を過ごしたかったし、坂崎のいない生活なんて考えたくなかった。

迷いはなかった。俺は八月二十日に香連神社で開かれるお祭りに坂崎を誘った。誘いのメールを送り、返事を待っている間、俺は始めて神様の存在を信じ、神様に祈った。そして祈りが通じたのか、坂崎はあっさりオーケーしてくれた。ありがとう神様。

ネットで札幌の天気を確認してみると、八月二十日の天気は晴れだった。始業式は八月二十三日。俺の夏は延長線上として秋に残るのか。それとも夏の思い出にしがみつくと鬱々とした秋がやってくるのか。

何の根拠もないくせに、俺はこの夏が永遠に続くものだと思っていた。

八月二十日の十七時半。俺は地下鉄琴似駅の前に立っていた。

琴似駅の近くは普段から人通りの多い場所だが、今日はやはりいつも以上に大勢の人で込み入っていた。浴衣を着た女の子やカップルが笑顔を振りまきながら俺の前を通り過ぎていく。

坂崎と出会う前の俺なら、カップルを見ただけで暗い気持ちになり、心の中でぐだぐだと汚い言葉を吐き自分の運命を呪っていただろう。でも今の俺は仏の心を持っている。楽しそうにしているカップルを笑顔で見送る事が出来るのだ。二人の恋に幸あれ。

待ち合わせ時間より二十分遅れて坂崎はやってきた。驚く事に坂崎は藍色の浴衣を着ていた。

「浴衣着てきたんだ」

坂崎はコクリと頷いた。

「うん！」

坂崎は巾着袋を手にはぶら下げながらニコニコ笑っている。ああ幸せだ。人生って素晴らしい。俺を産んでくれた両親に感謝！

「あ、ていうかごめんね遅れて」

「いや、全然大丈夫。なんか用事あったの？」

「ああー。ちょっとね、舞台観てたんだ。コンカリーニョで」

心がズキンと傷んだ。

俺はこの日、坂崎と会う事だけを考えていた。坂崎の事だけ考えて八月二十日を待ちわびていた。でも坂崎は違う。今日は俺以外の誰かと会う約束があったのだ。

坂崎にとって、八月二十日は俺と過ごすだけの日ではない。あくまでも幾つかある用事の内の一つでしかないのだ。……ってそんな事まで考えてしまうのは卑屈すぎる気もするが、どうしても心が暗くなってしまう。自分と相手の交友関係の広さに差がありすぎるといのは、あまり良い事ではない。

でもそんな事を考えていてもしょうがない。坂崎が俺の事をどう考えているかは知らないが、圧倒的に俺の方が坂崎に好意を持っている事は確かなのだ。それくらいの事で挫けてはいけない。

だから俺は心の焦りを隠して笑った。

「え、じゃあ浴衣で舞台観てたの？ なんか斬新」

「うるさいなあ。だって舞台終わってから浴衣に着替えてたらさ、待ち合わせに間に合わないんだもん」

「いや、ていうか実際遅れてるから」

坂崎は巾着袋を振りかざして俺の顔にヒットさせて、けらけら笑いながら走りだした。

俺の夏はまさに最高潮といった感じだった。世の中は素晴らしく、輝いていて、もう夏というのは俺のためにあるものだと本気で思えた。じめじめと暑い空気も、汗で張り付くシャツも、夏を彩るための大切な要素に感じられた。

香連神社のお祭りは少し変わっている。まず狭い神社の境内には出店が幾つかあるだけで、メイン会場は琴似本通りそのものとなっている。

地下鉄琴似駅から香連高校の手前まで歩いてざっと十五分ほどあるのだが、その道のりの歩道の右側に出店がずらりと並ぶのだ。そして歩道の左側に並んでいる薬局とか八百屋とか本屋とか、とにかく色々な店がお祭りに便乗して、店の前にワゴンを並べて商品を販売する。

つまり琴似の街全体を、お祭りの出店と普通の店が支配して大騒ぎするというのが、香連神社のお祭りなのである。

琴似の街は賑わっていた。香連高校のジャージを着た部活帰りの生徒たちも多く見かけたし、近所の高校の生徒達も大勢いた。子ども達はクジ引きの出店の前ではしゃいでいる。みんな笑顔で幸せそうな顔をしていた。

「ねえ赤沢くんクジ引きやろうクジ引き」

坂崎は巾着袋から五百円玉を取り出して、出店のおっちゃんに渡した。

「おっちゃん！ クジ引き二回！」

俺も慌てて五百円玉をおっちゃんに渡した。

坂崎は慎重に選びながらクジを二回引いて、運が良いのか悪いのかエアガンを二つ当てた。俺は運が悪くキテ



イチちゃんのハンカチが二つ当たったので全部坂崎にあげた。

「ねえ赤沢くん赤沢くん。なに食べるなに食べる？」

坂崎はぴよんぴよん跳ねている。なんだか幼い妹を見ているような心境になる。

「じゃあたこ焼き」

「たっこ焼きー！」

俺達はたこ焼きを買って、ずっとハイテンションに喋り続けていた。ポキャブラリーに乏しい俺はとにかく心の中で素晴らしい！ 幸せだ！ と叫んでいた。これ以外の言葉が見つからない！

ずっとマシンガンのようにまくし立てていた坂崎だが、突然「あー！」と前方を指さしながら叫び声をあげた。坂崎が指さした方向には見たことのない女が三人立っていた。

「香奈実達も来てたんだー」

坂崎はトコトコと三人の方へ歩み寄っていく。どうやら仲の良い友達らしく、楽しげに何やら会話している。途端に取り残されてしまった俺は為す術なくその場に立ち尽くした。

香奈実と呼ばれた女が、右手に持っているリンゴ飴で俺を指さしながら言った。

「誰こいつ？ もしかして彼氏とかじゃないよね？」

俺は咳き込んだ。坂崎は無邪気に即答した。

「友達だよ！」

そうです。友達の赤沢怜二です。今後ともよろしく。

「ふーん。私の事知ってる？ 椎本香奈実。J組なんだけど」

「いや。し、知らないです」

つい口ごもってしまう。大丈夫か、俺。

椎本は「へえー」とか「よろしくねー」とかそんな事を甲高い声で言うと、坂崎に「じゃあねー」と言って歩き出した。一緒に居た二人は俺を見る事もなく椎本の後に続いて行った。

やっと辛い時間が終わったと思った瞬間、また前方から坂崎の知り合いらしき奴らがやってきた。今度はサイヤ人のように髪の毛を逆立てた男三人組で、十八軒高校の制服を着ていた。

「おー。琴海じゃん」

俺は激しい心のダメージに耐えて、なんとかその場に踏みとどまった。他校に男友達がいるという事実。しかも下の名前と呼んでやがる。いや俺だって坂崎に「琴海って呼んでね」と言われてはいるのだが。

「えー何アンタらも来てたのー？」

坂崎は媚びるような声音でそう言った。男三人はげらげら笑う。そして突然笑うのをやめて、好奇心旺盛な眼差しで俺を見つめてきた。中央に立っていた背のでかい奴が坂崎に質問した。

「こいつ琴海の知り合い？ 俺見たことないんだけど」

椎本といいこのノッポサイヤ人といい、どいつもこいつも失礼な奴らばかりだ。

「んー。同じ高校の友達」

「へえ」

何故かノッポサイヤ人は鼻で笑った。

「あ、赤沢くん。こいつら私と同じ中学だった奴らで……」

ノッポサイヤ人は坂崎の言葉を遮るようにして、無駄に大きな声で言った。

「そうだ琴海。今度海行くべ海」

「えー。もう夏休み終わるよ」

「関係ねえよ。九月になっても行けるっしょ」

「んー。でも水着持ってないしー。今から水着買うのもなあ」

「別に季節とかにこだわる必要ねーだろ。水着買えよ。もちろんビキニで」

「うわ。私の体見る気満々じゃん」

「あたりまえだろ」

「開き直るな！」

「いや、でもお前の体見ても興奮しねーや」

ノッポサイヤ人は汚い声で笑った。神聖なる香連神社のお祭りで下品な事言うな。お前なんか仏様に呪われてしまえ。

野郎三人は「今度メールするわー」とか「胸でかくしとけよー」とか言いながら去っていった。

押し寄せる友人達の波は止まらなかった。結局お祭りの最中に坂崎の友人達とバツタリ出会った回数は六回だった。他校の生徒。後輩。先輩。バラエティに溢れる交友関係もそうだが、坂崎達の会話を聞く限り、今日出会った友人達とはかなり深い仲である事が良く分かった。

俺はもう爆発寸前だった。絶大なる敗北感。

坂崎は俺みたいな地味な奴ではない。交友関係が広くて、部活に精を出している積極的な子なのだ。俺なんかにつけ入る隙はあるのだろうか？

ホットドッグやチョコバナナを食べてお腹が満たされた頃、打ち上げ花火が始まった。そんなに豪華な花火じゃなかったけど、その場では歓声が上がリ、誰もが夜空を見上げていた。

坂崎は無言で花火を見ていた。俺は坂崎の顔を見て少し悲しくなった。彼女の瞳には俺と全く関係ない事が映っていて、俺の事なんて何も考えていないように感じられたから。

何かが違う。何かがおかしい。何かがズレている。

俺が欲しがっている決定的な何かが、坂崎の中には無い。そして坂崎はそれを欲しがっていない。でも俺は自分の決意を打ち砕く気は無かった。

打ち上げ花火が終わると、坂崎はゆっくりとこちらを向き、微笑んだ。

「綺麗だったね」

この時の坂崎のいたずらっ子のような笑顔は、坂崎と過ごした時間の中で一番印象に残っている。

お祭りが終わり、あれだけ沢山居た人達は街から離れていった。そして俺達は家に帰らず、琴似本通りから外れた住宅地の中央にある、小さな公園のベンチに座っていた。

坂崎はさっきクジ引きで当てたエアガンにBB弾を詰め込んでいる。俺は缶コーヒーをちびちび飲みながら、坂崎の手に握られたエアガンをじっと眺めていた。

「ズババババーン！」

坂崎は謎の効果音を叫びながら、前方に向かってBB弾を連射し始めた。そして全てのBB弾を撃ち終わると、つまらなさそうにエアガンをベンチの上に放り投げた。

「ねえ赤沢くん」

「うん？」

「夏休み終わるねー」

「ああ」

「最悪だねー」

「そうだね」

「宿題やった？」

「捨てちゃった。坂崎は？」

「全部やったよー」

「偉いね」

「んー」

このまま何もせずに夏休みを終えたら、俺達はどうなるのだろうか。少なくとも坂崎から奇跡的な行動に出る

事は無いだろうから、良い友達関係を続けられるのだろう。週二回行なわれる数学の合同授業は俺の楽しみの一つとなり、合同授業がある度に坂崎と楽しくお喋りする。廊下とか購買で偶然出会う度にやっぱりお喋りする。もしかしたら下校時間に玄関でバッタリ出会い、二人でどこかに寄り道する事もあるかもしれない。

それは俺が望んでいた高校生活だった。泣く子も笑い出す底辺の私立校に入学した俺に降り注いだ、ごくごく普通で明るい青春。その普通の青春を続けて、そして終わらせれば、高校を卒業した後も坂崎との友情は続き、大人になって酒を飲みに行ったりする事もあるかもしれない。年を取って三十歳くらいになった時、二人で高校二年生の夏を思い出し語り合う事もあるかもしれない。

ただ、現実はそんなに甘く無いだろう。坂崎にとって俺は大勢いる友達の中の一人にすぎなくて、あのノッポサイヤ人と同等の人間なのだ。このまま夏を終えても、もちろん坂崎を独占する事はできない。それに例え大人になった時に関係が継続していたとしても、二人で酒を飲み交わすという楽しい体験だけではなく、結婚式の招待状が届くという悲惨な体験だって起こり得るだろう。

それは耐え難い事だった。俺は坂崎にとってのエキストラじゃなくて、主役になりたかった。思い出を思い出として終わらせるのではなく、この思い出を永遠にしながら俺は人生をまっとうしたいのだ。

俺は舌で唇を舐めた。まだ早い。その思いはまだ残っている。でも今しかない。坂崎は恋人なんていないとか、そんな事を考えるようなタイプではないと思う。何かきっかけがあればすぐに恋人を作るだろう。

そのきっかけが訪れる前に、俺自身がきっかけにならないとダメなんだ。

「あのさ」

「なあに？」

坂崎は下から俺の顔を覗きこんできた。その上目遣いには凄まじい破壊力がある。もちろん坂崎は自分の上目遣いに破壊力がある事を十分に理解しているのだろう。そして、このタイミングで自信満々の上目遣いを炸裂させているという事は、俺の頭の中を見透かされていると考えていいだろう。

「その……」

「うん」

頭が破裂しそうだったし、心臓は機能停止寸前だった。

人に告白するという事は、尋常ではない労力を必要とする。俺はその事に始めて気がついた。

「つ、付き合ってくれる？」

多分、この時の俺は顔が真っ赤だったと思う。

恐る恐る坂崎の方を見ると、彼女は冷静な表情をしていた。別に驚いた様子もなかった。

坂崎は頭を俺の肩にちょこんと乗せた。

「考えとく」

坂崎との体の接触は、あの日公園のベンチで俺の肩に頭を乗せてきたのが最初で最後だった。あの行動は恋愛ドラマのヒロインになりきって自分に酔いしれた上での謝罪とプレゼントの意味があったように思えるし、ただ単に俺を舐めきっていただけのようにも思える。とにかくあれは限度を超えた反則行為だった。経験の浅いアホな男子高校生には見抜けない偽りの意思表示だった。

夏休みが終わった直後に、坂崎はイケメンの大学生と付き合い始めた。この事を教えてくれたのは椎本だった。

椎本はその事実を教えてくれただけではなく、坂崎の本音まで教えてくれた。

「まあなんていうか……。お祭りで二人に会った時ビックリしたんだよね。あれ、琴海あの大学生の事諦めたのかな？ って。でも違ったみたいだね。つまりその……」

椎本はそこで少し間を置いてから、意を決したように言った。

「琴海にとって、赤沢くんはキープ君だったんだよ。琴海ハッキリそう言ってたよ」

椎本は俺の肩をポンと叩いた。

「こういう事はさ、知らない方が幸せなんだと思う。でも敢えて教えておこうと思ったんだよね。知っておいた方が、この先色々と思えると思うし……」

その時の俺は感情的になっていて、「坂崎みたいな奴どう思う？」という質問をぶつけた。その言葉には坂崎を強く非難する意味が込められていて、椎本もそのニュアンスには気がついていてと思う。でも椎本は笑顔で答えた。

「琴海って恋愛に関してはちょっと残念な所があるかもしれないけど、それでも良い所は沢山あるんだよ。それにね、私は今のところ完璧な人間とは一度も会った事がないし、そもそも友達に対して完璧な人格なんて求めてないの。ねえ赤沢くん。琴海はね、私の大切な友達なんだよ。何があっても、琴海がどんな残酷な人間になったとしても、永遠にね」

坂崎は友達の紹介で、今年の春頃にその大学生と知り合ったらしく、どうやらずっとアプローチを続けていたらしい。そして始業式の翌日の八月二十四日。イケメン大学生に呼び出されて告白されて、坂崎は当然のごとくオーケーした。俺が坂崎の返事を待っていた夏の終わりに、坂崎は自分が望む恋を成就させたのだ。

坂崎は夏休み、恋人がいなくて寂しかった。年上の男を追いかける日々に悶々としながら夏を過ごすのが嫌だった。だから夏の孤独を埋めるための相手がほしかった。

俺だって最初はそうだった。でもすぐに坂崎の愛嬌に惹かれ、舞台稽古を観た日からもう完全に坂崎の事で頭がいっぱいになった。しかし残念な事に俺だけが本気になって、坂崎が本気になる事はなかった。

坂崎なら、適当な男友達に狙いを定めて付き合う事は簡単だっただろう。例えばあのノッポサイヤ人に「付きあおう」と一言伝えるだけで、ノッポサイヤ人は喜んで坂崎と付き合い始めたに違いない。

でも、それはダメだった。あのノッポサイヤ人に限らず、長い歴史を刻んでいる友情関係を壊したくない。仲の良い大切な友達とはずっと友達でいたいから。

そこで、赤沢怜二の登場だ。坂崎にとって俺は赤の他人だから、俺との関係が崩れてしまっても問題はない。そして試しに近づいてみたらそれなりに気に入ったから、赤沢怜二は孤独な夏を埋めるためにはピッタリの存在となった。恋人同士になれなくても痛くも痒くもないし、もし本当に好きになれば、大学生の事なんか忘れて俺と付き合えばいい。

俺はなんとも都合の良い人間だった。

もちろん坂崎に恋人が出来たと知った時はショックで死にそうになったし、自分が都合の良い男だった事とか、とにかく数えきれないほど色々な事に気がついた。しかし意外な事に、坂崎に対する未練は割りと早く吹っ切る事が出来て、本格的に秋が始まった頃には「まあそんなもんか」と思えるようになっていた。

でも、一度だけ坂崎に対する未練を爆発させた事がある。

夏が終わって冬が訪れた頃、I組のデブスに告白されたのだ。

そいつは推定体重八百九十二キロ。ウエストは二十三メートルくらいはありそうだった。顔にはニキビが幾つかあって、頬はアンパンマンのように赤く、口の中にリンゴが入っているのかと思うほどに膨らんでいた。そしてミニスカートから象のように太くて醜い足をさらけ出して自信満々に校内を歩きまわるといふ謎の生命体だった。

突然学校の近くにある小さな公園に呼び出されて、そのデブスはもじもじしながら、やたらと媚びた甲高い声で告白してきた。俺はブチ切れた。

何を勘違いしてるんだ。

俺くらいのレベルの男なら、自分でも付き合えと思ったのか。

ふざけるな。

俺はあの坂崎琴海と夏を過ごしていたんだぞ。可愛くて痩せてて愛嬌があって皆に好かれていて友達が多くて、大学生なんかと付き合っちゃってるあの坂崎琴海と花火をしたり、お祭りに行ったりした事があるんだ。

お前なんか、いつも同じデブス達と群がって灰色の人生を送っているようなクズじゃないか。クラスのリーダー格の連中に裏でボロクソ悪口言われてバカにされてるような底辺の人間じゃないか。お前がいくら手を伸ばしても届かないキラキラとした世界に住んでいる坂崎琴海と、俺は触れ合っていたんだ。俺とお前が同レベルだなんて思わないでくれ！

でも現実はどうだろうか。坂崎は大学生の彼氏をゲット。俺は坂崎に良いように弄ばれ、寂しい独り身。そして目の前にはデブス。

悔しかった。俺は坂崎琴海のような人気のある女と付き合えるような器じゃないのだ。実際問題として、坂崎が俺を好きになる事はなかった。

俺にはこの程度の女がお似合いなのか？ こういう低レベルの女としか付き合えないのか？ こんな奴じゃないと俺を好きになってくれないのか？ ずっとそんな事考えてた。でもそれは当たり前の事なのだ。俺が坂崎のようにレベルの高い女だけを好きになるように、坂崎もレベルの高い男だけを好きになる。でも当時の俺は、今となっては語るのも億劫になるほど当たり前の事が分かっていなかった。きっかけがあればそれだけで純粋に恋愛ができると思ってた。しかし現実はそのままでシンプルじゃない。

そう、シンプルじゃない。現実残酷までに複雑なのだ。でも高校生だった俺は不公正な世の中から目をそむけて、自分の事を棚にあげていた。当たり前の事を当たり前だと思っていなかった。ただ自分の運命を呪い、デブスに告白された事に苛立っていた。

俺はデブスの告白を断るだけじゃなく「デブ」とか「ブス」とか「勘違いするなクソ野郎」とかそういう暴言を吐きまくった。デブスは泣いていた。

俺は坂崎の事をあまり悪く言えないだろう。言える訳がないのだ。

今になって気づいた事がある。俺と坂崎が演技をしていた事だ。

俺達は尋常ではないほどに純粋で清潔だった。人の悪口を言わず、腹黒い所も見せず、漫画に出てくる登場人物のように爽やかな夏を過ごしていた。でもそれは嘘だ。幻影だ。純粋すぎる人間関係なんてあり得ない。

坂崎は大学生の彼氏に対して、あの夏に弄んでいた赤沢怜二という男の話を自慢気に語って聞かせたかもしれない。バカな男だよ。琴海お前は本当に悪い奴だな。ちょっと遊んでみただけだってば一。そして二人は勝者の笑い声をあげる。そういう関係こそ、本当の恋人同士と言えるのだ。

でも、あの夏の俺達はどうか？ お互いありえないほどに良い人だった。自分の全てをさらけ出す事なんて一度もしなかった。二人で良い人の演技をして寂しい夏を埋めていただけだ。

そう、もちろん演技をしていたのは坂崎だけじゃない。俺も演技をしていた。良い人ぶってた。でも実際は、告白してきた女に暴言を吐くようなクズ野郎でしかない。

そういう黒い所を見て見ぬ振りして隠しながら、異性と清潔で理想的な日々を過ごす。それはただのオママゴトに過ぎない。そんな当たり前の事に気づいてなかった。そしてあの時は、自分が演技をしているという自覚すらなかった。

そして、俺は坂崎の演技を見抜けないアホだった。いや演技っぽい喋り方とか仕草に気づく事は何度かあったけど、それは愛嬌の内なんだと思って微笑ましい気持ちでその演技を見ていた。究極のバカだった。

もちろん坂崎は俺の演技に気づいていたはずだ。あの頃の俺は全てにおいて未熟なガキだった。

高校を卒業した後、偶然街でそのデブスとすれ違った事がある。始めは誰だか分からなかったけど、顔に面影があったのであのデブスだと気がついた。

デブスは推定体重四十五キロくらいになっていた。そして顔はまあ、なんとか直視出来るくらいのレベルにはなっていた。

デブスは俺に気がつくと、すれ違いざまにただ一言「死ね」と吐き捨てた。

夏休みが終わってから最初の数日間は、合同授業の時とか廊下ですれ違った時に、坂崎は申し訳無さそうな顔で俺に話しかけてきた。でも俺が力のない返事ばかりしているうちに、やがて話しかけてこなくなった。

夏休みが終わってから始めて訪れた金曜日。購買でバツタリ出会い、「またメロンパン？」と聞かれて「うん」と答えたのが、多分坂崎と交わした最後の会話だったと思う。

駄菓子屋にはあれ以来一度も行っていないし、ドムドムバーガーにも発寒川にも行っていない。坂崎の事を思い出してしまうから。

それでも、たまに高校二年生の夏の出来事はどうしても思い出してしまう。特に思い出するのは、駄菓子屋のゲーム筐体の前に座り込んでいた坂崎の姿だった。あの瞬間だけは清純で、何もかもが鮮やかで汚れていなかった。

俺には坂崎を憎んだり恨んだりする権利があるはずだけど、坂崎に対して憎しみとか恨みとか、そういう感情を抱く事は無かった。そりゃ俺の好意をないがしろにして、都合の良いキープ君にしていた事はムカツクけど、どうしても坂崎琴海の事を悪く思えなかったのだ。

その理由は明白だった。

役者として輝いていた坂崎の姿をこの目でまじまじと観ていたから。坂崎の演劇に対する気持ちを何度も聞いていたから。俺は未だに、舞台稽古で演じていた彼女の気迫溢れる演技を忘れられないでいる。

ちなみに、俺は学校祭で行われた坂崎の舞台は観に行っていない。

坂崎は涙をぼろぼろ流し、信じられないといった表情で俺を見つめている。

「笹岡麻里奈だよ。ほら、演劇部のために絵描いてくれてた……」

「ああ……」

思い出した。始めて舞台稽古を観に行った日、確かイラストを持ってきた女がいた。

あの子が、死んだのか。

「どうして覚えてないの」

「一度しか会ってない。ロクに会話もしてない」

坂崎の瞳から絶えず涙がこぼれ落ちていく。慰めようとする気持ちは全く起きなかった。

ただ、俺は「今でも役者やってるの？」と聞きたいだけだった。例え坂崎との思い出がトラウマになっているとしても、それだけは確認しておきたいのだ。

でも、こんな状況でそんな事聞ける訳がない。

そう思った時、ふと坂崎の過去の言葉が蘇ってきた。

『他人が死んでも笑って、騒いで、そして死者に対してゴロクソ罵詈雑言を浴びせる。人間はそういう事を簡単に出来る存在なの。それが人間の本当の姿なんだ』

やっぱり坂崎とは良い友達で終わっていればよかった。役者としての坂崎だけ知っていればよかったんだ。そ

してずっと、役者としての坂崎を応援していたかった。

でも、現実残酷だ。俺は坂崎が今も役者をやっているのか、それともやっていないのか。それすら知らないんだから。

「麻里奈死んだんだよ。ねえ、私どうすればいいと思う？」

「分からない」

坂崎は目を見開いた。そして、唐突に皮肉めいた笑みを浮かべた。

「……思い出がほしかったんだ。思い出がないとダメだと思ってた。思い出があればね、人生ってもんが豊かになると思った。だから高校生の時は思い出作るのに必死だった」

「うん」

「でもね、私麻里奈との思い出作ろうと思った事なんて一度もないんだよ。ただずっと自然な形で一緒に居ただけなの。そしていつの間にか、気がついたら、麻里奈との思い出が出来てたの」

「うん」

「私分かったんだ。がむしゃらに作ろうとした思い出は本当の思い出にならないんだ。ねえ、この意味分かる？」

「高二の冬にね、同じクラスの女に告白されたんだ。デブで、ブスだった」

「……え？」

「断ったよ。しかも断るだけじゃなくて、ボロクソに暴言吐いた。あいつ泣いてたよ」

坂崎はじっと俺が続きを口に出すのを待っていた。

「俺はクズだよ。クズの中のクズさ。そしてお前もそれなりにクズだ。坂崎は俺みたいに限度を超えたような事はしなかったけど、思わせぶりな態度取りまくって、人の心を弄ぶのは許される事じゃない。でもね、坂崎」

「……なに？」

「俺はお前に聞きたい事がある。今でも役者やってるのか？」

「やってるよ。バイトしながら……」

坂崎は一瞬だけ、地面に置いてある熊の頭に目をやった。

「これ、この商店街のマスコットのバイト」

悔しくて歯ぎしりしそうになった。あの夏が演技だったとしても俺がキープ君だったとしても、何が何であろうと、二人で夏を過ごした事も坂崎が舞台に賭けていた情熱も事実なんだ。俺は決して過去に溺れて今の時間を全て否定する気はない。だって何もかもが分かりきった事なんだから。

でもやっぱり、思わずにはいられないのだ。何かが違う。あまりにも退屈すぎるのだと。

坂崎が世界を代表するような大女優になれるとか、さすがにそこまで大げさな事は考えてなかったけど、坂崎は大人になっても輝きながら生きているに違いないと思っていた。でも違う。全然違うのだ。坂崎は今でも舞台役者をやってはいるけれど、普段は熊の着ぐるみを着て寂れた商店街で風船配ってお金を稼いでいる。高校生の頃は生き活きとしていた目は今では完全に死んでいる。友達に自殺してしまった。そして、過去に弄んだ男に対して私はどうすればいいのかとすがっている。

「なあ坂崎。俺はね、いまお前と偶然出会って、なんか知らないけどいきなりムカムカしてきたんだ。昔の事思い出して、お前にも自分にも腹が立つんだよ。でも、それでも、今でも坂崎が役者やってるって事が分かってめっちゃくちゃ嬉しいんだ。俺は坂崎が役者として成功する事をマジで祈ってるし、一生役者を続けてほしいって思ってる」

「……どうして？」

俺はせいぜい笑ってやった。

「悪いけど、俺は顔もよく思い出せない奴のために涙は流せない。だからもう帰るよ。じゃあな」

俺は振り返って、ゆっくりと歩き出した。でも坂崎は俺の腕を力強く引っ張った。

その行為は反則だった。どう考えても反則だった。坂崎はいつも反則行為を犯す。

「赤沢くん」

振り返ると、坂崎は何か訴えかけるような、救いを求めるような表情をしていた。その表情を見て怒りがこみ上げてきた。

「なんだよその目は！ 俺に何してほしいんだよ。お前が満足するまで慰めろってか？ それとも知らない奴のためにびいびい泣けばいいのか？」

「赤沢くん！」

坂崎は俺の腕を握ったまま、すがるようにして言った。

「赤沢くんの事好きだったよ。本当だよ。それは嘘じゃない」

俺は坂崎の腕を振り払った。

「一つだけ良い事教えてやる。お前は一生役者として生きろ。絶対に役者の道は諦めるな。その方がいい」

俺はそれだけ言って歩き出した。背後から坂崎のヤケクソのような叫び声が響いてきた。

「なんで私の事応援してんだよ！ 私赤沢くんに酷い事してたのに！ ぜんっぜん意味分かんないよ！」

俺は心の中で呟いた。

あの時の椎本の言葉を、お前に聞かせてやりたいよ、と……。